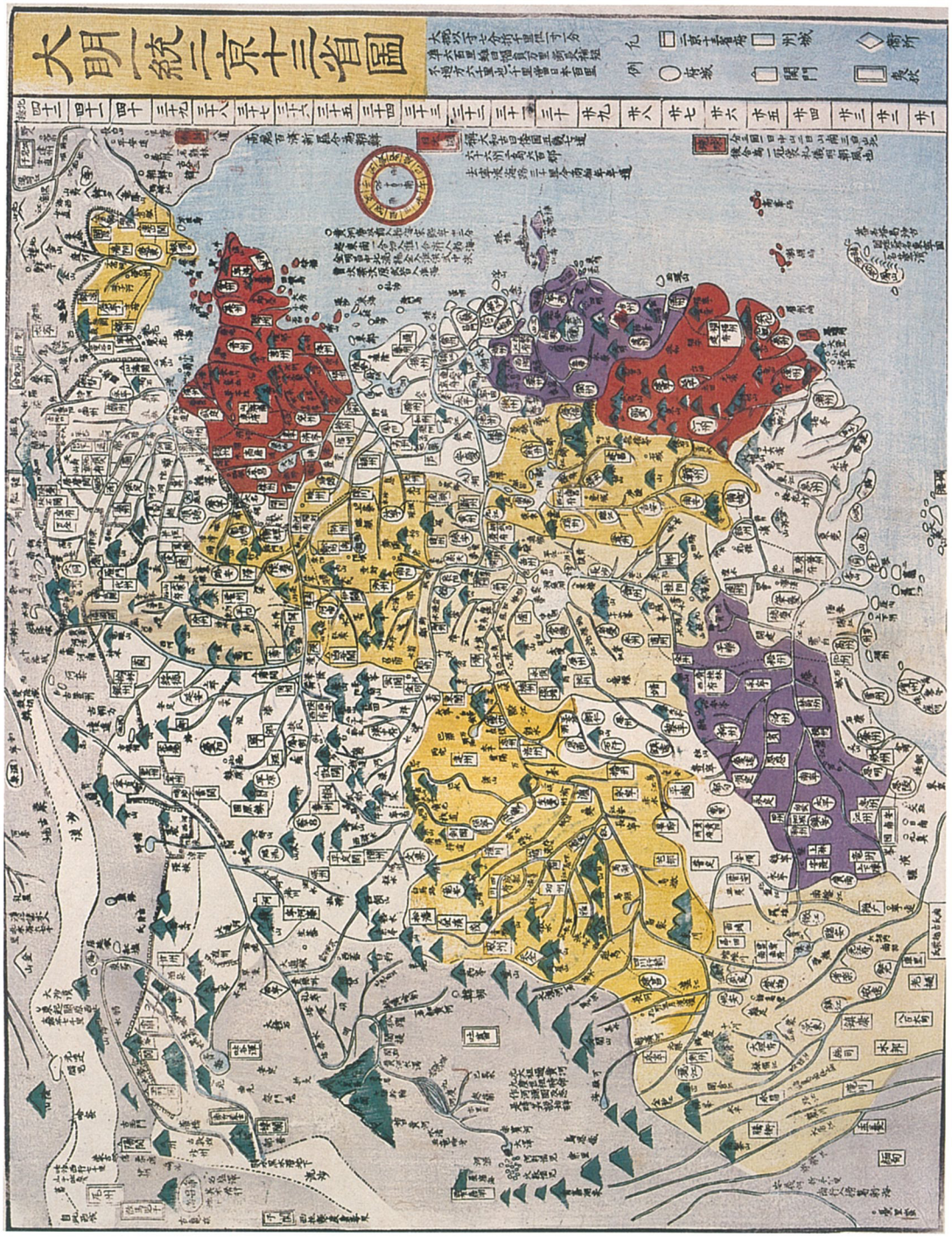


◆絵図のいろいろ　唐土歴代州郡沿革図（解説八ページ）

蓬古

HÔSA

NO.64

名古屋市蓬左文庫
HÔSA LIBRARY, CITY OF NAGOYA

展示室

一・蓬左文庫と海外1
　蓬左文庫と東アジア世界
　四月一四日～六月一〇日

二・雑賀重良旧蔵歌書
　七月一四日～九月一六日

◆蓬左文庫と海外1
蓬左文庫と東アジア世界

欧米志向の近代化を進めてきた、現在の日本において、海外の文化といえば、西洋の文化のみを思いこみがちですが、江戸時代までの日本は中国の文化の影響を大きく受け、学問、教育の中心を漢学においていました。

初代尾張藩主徳川義直（一六〇〇～五〇）は、父家康（一五四二～一六一六）の没後に譲られた旧蔵書三、〇〇〇冊（駿河御譲本）を基礎に、尾張藩御文庫を創設しました。家康がその晩年に駿府城内（静岡市）に収集した蔵書のほとんどは漢籍（中国・朝鮮の書物）で、さらにその多くは一六世紀に朝鮮で出版された書物であったと想定されています。

徳川義直は、父家康の学問好きの影響を強く受け、書物の収集に努力し、その晩年には、蔵書数が約一九、〇〇〇冊にも達したといわれます。書物の多くは、中国貿易を通して国内にもたらされた中国明代の書物で、中国の学術文化の集大成を目指そうとしたかのように、多様な分野の書物を収集しています。

蓬左文庫の前身である尾張藩御文庫の蔵書は、漢籍が高い比率を占め、とくに一七世紀の段階では蔵書の八割以上であったといわれています。今回の展示では、中国・朝鮮からもたらされた書物を、（一）徳川家康の旧蔵書であった駿河御譲本、（二）初代藩主義直・二代藩主光友（一六二五～一七〇〇）の収集した書物のうちから、特徴的なものを選んで紹介します。また、（三）『群書治要』『孝経鄭註』など、尾張の漢学者の優れた研究業績で、中国の学界でも評価された書物も、あわせて紹介します。

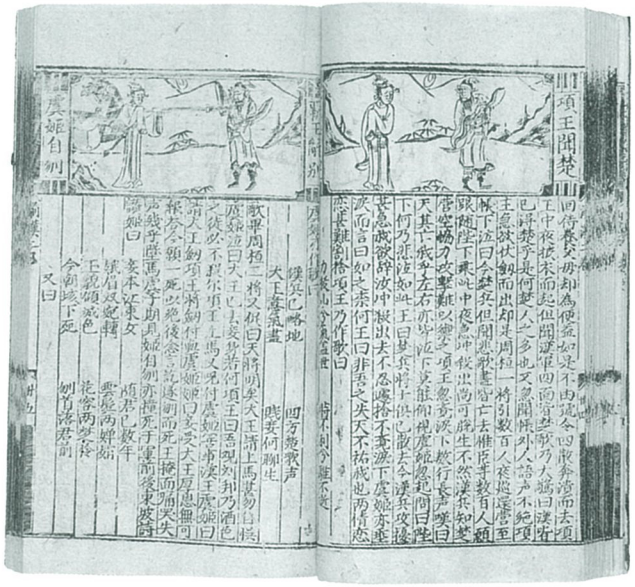
東アジア世界における漢字文化圏の結びつきを体現しているかのような、蓬左文庫所蔵の優れた漢籍の数々を、どうぞご覧下さい。

◆雑賀重良旧蔵歌書

和歌書の収集・研究家として知られた雑賀重良氏（一九〇〇～八三）の没後、ご遺族によって昭和五八年一二月に蓬左文庫に寄贈された旧蔵書は、江戸時代の刊本、写本から近現代の雑誌まで和歌に関する書籍・雑誌など、一八、二〇〇点余からなります。

とくに、近世・近代の歌集は、同旧蔵書の中心を占めており、著名な歌人の歌集から、地方名望家の私家版まで、非常に広い範囲に及んでいます。今回の展示は、近世から近代までの著名な歌人の歌集のうちから、現在まで当文庫で未紹介のものを展示します。

近世にはいると、和歌を詠む人々は中世に比べて一層広がります。したがって、中世以来の伝統を



▶ **全漢志伝**（ぜんかんしでん）　明・熊鐘谷
12巻2冊　明・万暦8年（1600）刊
漢代の歴史に取材した絵入り歴史小説。
右側は、漢の高祖（劉邦）に包囲された項羽が、楚歌を聞く場面（四面楚歌）。左側は項羽の寵姫虞美人の自害の場面です。

◀ **切火**（きりび）　島木赤彦　大正4年（1915）刊
アララギ派の歌人赤彦の第2歌集。
大正2・3年作の短歌263首をのせる。

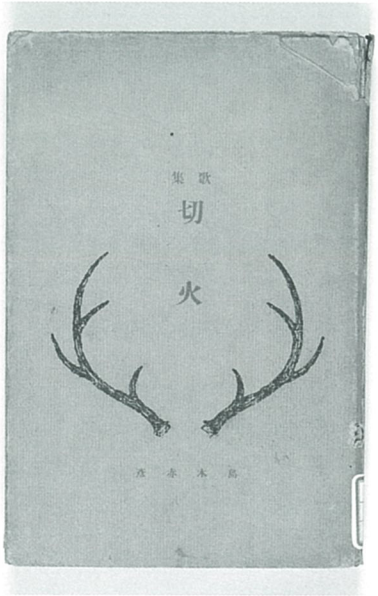
保持していた公家歌人たちよりも、むしろ公家以外の歌人たちの活動が注目されます。国学者賀茂真淵（一六九七～一七六九）は、『万葉集』を中心に日本古典を広く研究し、日本の古来の精神（古道）の復活を提唱しました。真淵とその門下の人々（県居派）の和歌は、万葉調に特色があります。他方、香川景樹（一七六八～一八四三）は、『古今和歌集』を理想として、真淵の復古主義に反対し、あるがままの感情を重んじた、平易な和歌作りをしてみせました。その門下（桂園派）は全国に広がり、歌壇の大勢力となりました。その他にも、人間感情を自然のままに表現しようとして香川景樹にも大きな影響を与えた小沢蘆庵（一七二三～一八〇一）、万葉調の和歌で人間性を大胆率直に表現した平賀元義（一八〇〇～六五）などが、特色のある作歌活動をしました。

近代にはいっても、八田知紀（一七九九～一八七三）らの桂園派の隆盛が続きましたが、明治中期に正岡子規（一八六七～一九〇二）らの短歌革新運動が起こり、近代短歌に急速に変化していきます。近代短歌の主流派は、正岡子規の系統のアララギ派であり、大正期にはいっても島木赤彦（一八七九～一九二六）、斎藤茂吉（一八八二～一九五三）らが活躍します。そのほかにも、与謝野晶子（一八七八～一九四二）、北原白秋（一八八三～一九四二）らの浪漫主義的な流れ、現実生活に目を注いだ生活派の流れなどが注目されます。

こうした近代歌人の歌集の初版本、またはそれに近い古い時期のものは、表紙絵や装丁などに時代を反映した特色が現れており、味わい深いものがあります。

雑賀重良旧蔵歌書群の中核ともいうべき、近世・近代の著名歌人たちの歌集を、この機会にどうぞご覧ください。

本年度後半の展示会では、九月二九日～一一月二五日に「蓬左文庫と海外２　海外認識の広がり」ということで、幕末海外情報関係資料を中心に紹介します。



業務縮小のお知らせ

徳川園整備事業の一環として、蓬左文庫の改築をおこなうことになりました。これにともない、下記のとおり業務を縮小させていただきます。ご利用の皆様には大変ご迷惑をおかけし、申し訳ございませんが、ご了承くださいますよう、お願い申し上げます。

なお、新館は平成16年度秋に開館の予定です。

記

1）期　　間　平成14年1月5日から平成16年9月30日まで
（平成15年度半ば以降は、完全休館の予定）

2）休館日の変更　毎週**日曜日**（月曜日から変更）、第3金曜日、国民の休日、年末年始

3）主な業務変更内容

展示室：休　室

閲覧室：休　室

（なお、「雑賀重良旧蔵書」は上記に先立ち**平成13年10月より閲覧休止**となります）

複写（電子コピー）、マイクロフィルムからの複製

：窓口および郵送にて受付（**即日渡しは不可**）

お問い合わせ受付：従来どおり

（資料の内容に関わるご質問にはご回答できかねる場合もありますのでご了承ください）

など

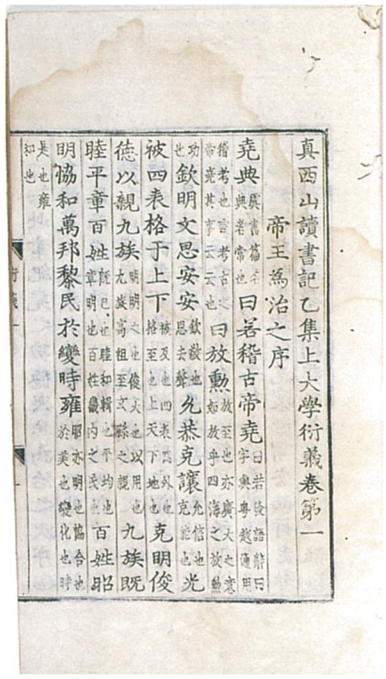
詳しくは、当文庫までお尋ね下さい。

名古屋市蓬左文庫　TEL（052）935－2173

大学衍義（だいがくえんぎ）　13冊　朝鮮（李朝）刊　38.5×23.5cm

宋・真徳秀による「大学」（儒学の基本的教典四書のひとつ）の解説書。美しく鮮明な金属活字により印刷されている。駿河御譲本（２頁参照）。

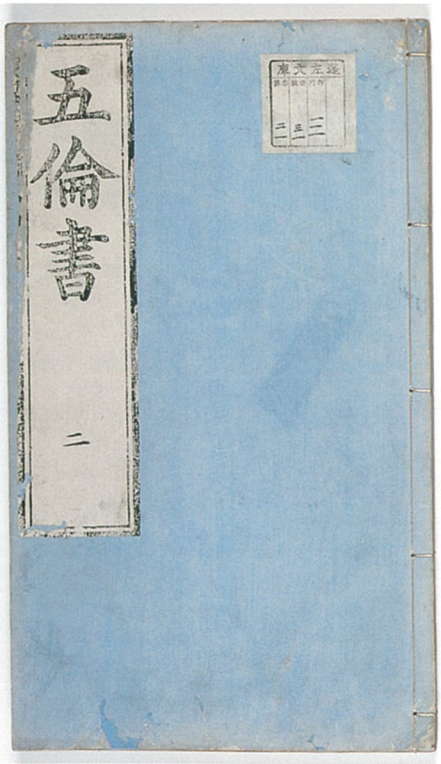
◀ 黄色の表紙、朱の綴じ紐は朝鮮本の特徴である。

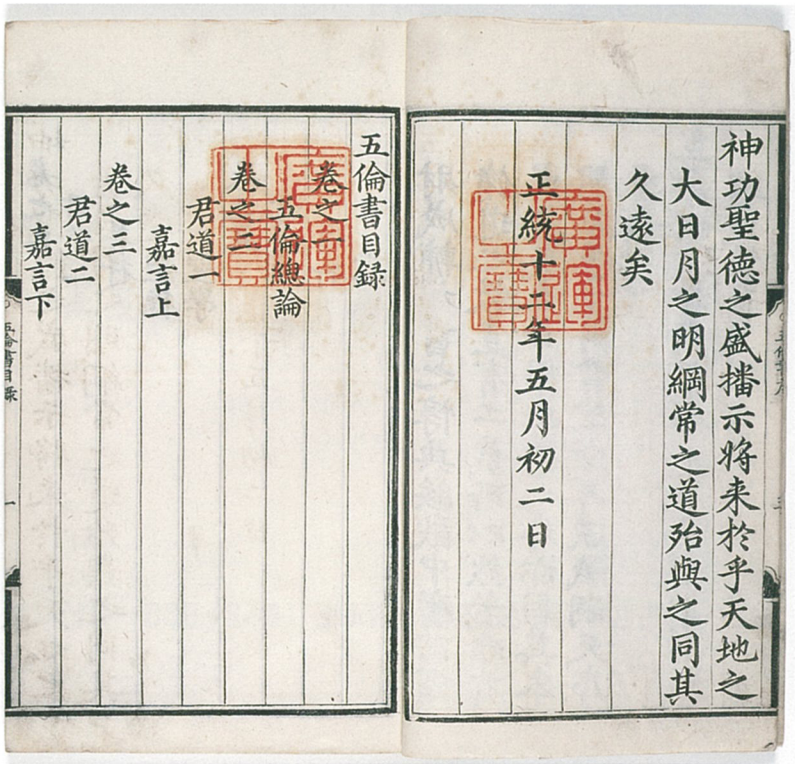


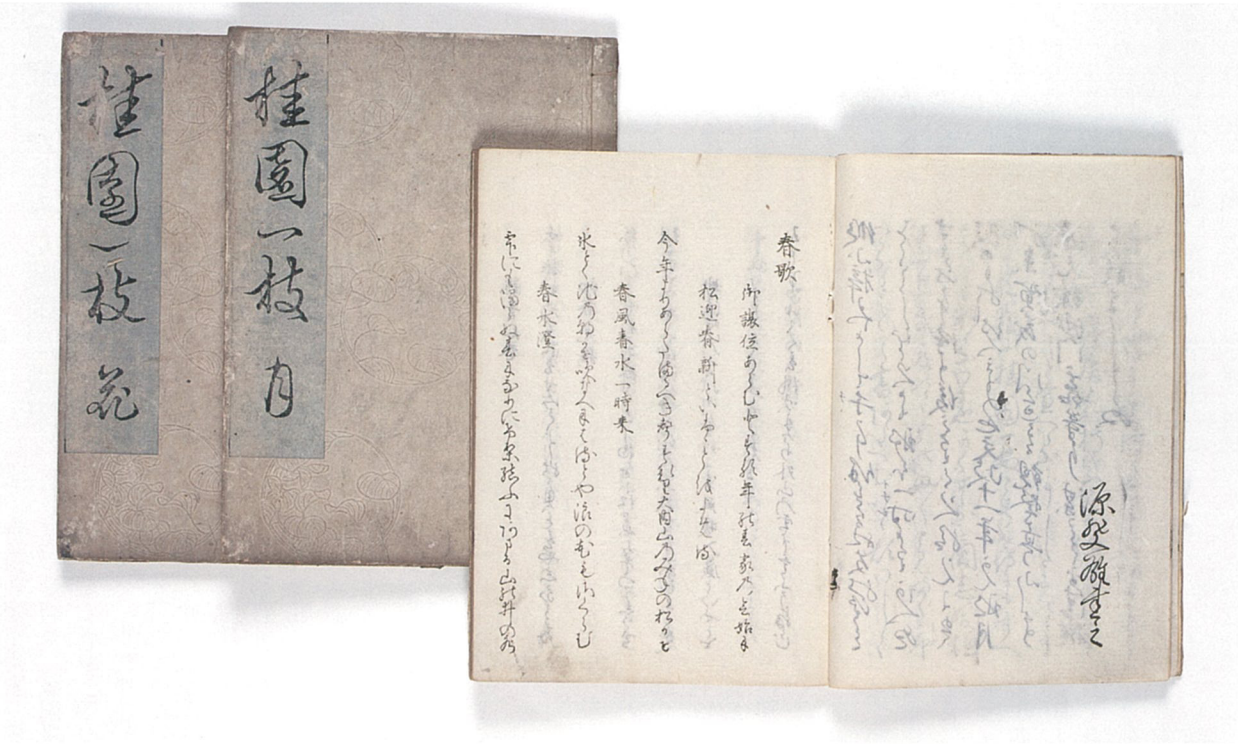
第一巻冒頭。帝王の読むべき書として尊重された。▶

五倫書（ごりんしょ）　31冊　明・正統12年（1477）刊　26×21cm

人の常によるべき五つの道について、明皇帝宣宗が述べた書。大型の朱印「広運之宝」は中国の帝室の出版物に捺された。２代尾張藩主徳川光友の収書した書物。







桂園一枝（けいえんいっし）　3冊　文政11年（1828）序,刊本　26×19cm

香川景樹（かげき）の自撰歌集。景樹の歌風の特徴がよく出ている歌集であり、賛否両論の反響がみられた。

雲母集（きらら）　1冊　大正4年（1915）刊　18×13.5cm（初版本）

北原白秋の新しい歌風を示す歌集。右から初版本、昭和12年（1937）刊の白秋文庫本、同27年刊の創元文庫本。

蓬左文庫蔵書からみた戦国尾張史

織田信秀・信長以前の織田弾正忠家

名古屋市蓬左文庫の蔵書のなかには、戦国時代の尾張に関する貴重な史料が残されている。公家三条西実隆（一四五五～一五三七）の『実隆公記』、山科言継（一五〇七～七九）の『言継卿記』など、同時代人の残した日記は、戦国時代を解明する基本史料といえるが、江戸時代になってまとめられた書物にも、旧家などに伝えられてきた伝承に拠った、興味深い記事に出会うことがある。

尾張藩士内藤東甫（一七二七～八八）の著書、『張州雑志』は、生彩あふれるさし絵で知られているが、寺院・神社や旧家に伝わる古文書や家系図も数多く書写されており、現在原本が失われてしまったものなどはとくに貴重な史料といえよう。

今回は、『張州雑志』の記事から、織田弾正忠家と津島との関わりに関する伝承を紹介してみたい。

織田弾正忠家と尾張津島

織田弾正忠家は、戦国期に尾張勝幡城（現中島郡平和町・海部郡佐織町）を居城とした織田氏の一族で、代々の当主は弾正忠の官名を名乗ることが多かった。信秀（一五一一～五二）の代には尾張国内の覇権を握り、その子信長（一五三四～八二）は天下制覇をめざしたので、日本の歴史を大きく動かした一族といえよう。

織田信秀・信長父子以前の織田弾正忠家については、未だに不明な点が多い。尾張の一大名にすぎなかった信秀が、天文一二年（一五四二）に禁裏（皇居）修理のために四〇〇〇貫という巨額な献金をしたり、信長が早くから上洛をめざすといった、彼ら父子の尾張国内にとどまらない視野や行動範囲の広さを育てたものは一体何であったのか。信秀・信長以前の弾正忠家一族のあり方の中にそれをさぐろうとするのは、戦国尾張を中心にした歴史の大きな転換に至る経緯を明らかにすることに役立つと考える。

さて、織田弾正忠家が尾張にとどまらない視野と、ひろく行動できるだけの経済力を獲得できたのは、勝幡の南にある津島を掌握できたことによると、早くから注目されてきた。津島は、津島御師の活動によって東国にまでひろく信仰された津島牛頭天王社の門前町であり、天王川を通じて伊勢湾の海上交通と結ぶ港町としても繁栄していた。四家・七党・四姓と呼ばれた津島の有力住民は、水運を利用した商品流通に関与して豊かな経済力をもち、まとまりの強い人々であった。

『張州雑志』巻七七に引用された、津島の四家（大橋・岡本・山川・恒川）の一家、大橋家の家譜（「大橋家譜」）によれば、

大永年中、織田と諍論数度に及ぶ。同四年の夏、織田兵、津島を焼く、早尾の塁に退き又戦ふ、此時、津島中并びに寺社什物官符等焼失云々、

とあり、大永四年（一五二四）に和睦し、同一一月に大橋清兵衛重辰と織田氏の女との結婚により、以後津島衆は織田弾正忠家に服属したといわれている。

また、同じく『張州雑志』巻六二には、大永四年五月三日付で、信秀の父織田信貞が、津島牛頭天王社の神職（祢宜）の相続を認めた文書が引用されており、織田信貞が津島を勢力下に置いたことを裏づける史料といえる。

江戸時代の伝承も含めてであるが、『張州雑志』によれば、大永年間（一五二一～四ごろ）に織田弾正家と津島が抗争し、大永四年に津島が同家に服属したと考えられてきた。ところが、織田信秀以前の弾正忠家に関する新しい事実が、近年明らかにされてきたので、それを紹介するとともに、『張州雑志』の記事についても再検討してみたい。

織田弾正忠信貞と連歌師たち

大永二年（一五二二）に、連歌師宗長（一四四八～一五三二）は、伊勢神宮に奉納する千句連歌を詠むために駿河を発って伊勢を訪れた。室町幕府の管領細川高国（一四八四～一五三一）が、伊勢神宮に祈願していた政権奪回の実現のお礼にと、宗長に依頼していたのである。この『伊勢千句』をともに吟ずるために宗長から呼ばれた、同門の連歌師宗碩は、大永二年七月二〇日に京都を出発する。その時の紀行文『佐野のわたり』に

その比、尾張の国よりさる人の上洛ありしを、伊勢のわたりまでと誘いつつ、先づ都出ではべりし（下略）

とある。この「尾張の国よりさる人」が、織田信秀の父、信貞（定）である事実を、鶴崎裕雄氏は、『経尋記』と考え合わせることで昨年指摘された。[註1]

奈良興福寺別当であった大乗院経尋（一四九八～一五二六）の日記である『経尋記』には、宗碩一行の大和国内での旅程を記している。以下、現代語訳して紹介する。

（大永二年七月二二日の記事）

宗碩法師が（奈良に）下向してきた。逍遙院（三条西実隆）の書状を持参している。（中略）伊勢山田で宗長と二人で千句を吟ずるために、旅をしているということだ。

（同　七月二六日の記事）

今度宗碩に同道している、尾州の小田霜台という者が、長谷寺へ万疋（銭百貫文）を寄進したそうだ。

「霜台」は弾正台という官職の中国風のよび方であり、尾州小田霜台は、尾張の織田弾正忠ということであろう。当時の関係史料よりみて、大永二年の織田弾正忠は信貞とみてまちがいない。

大永二年の織田信貞上洛の目的について伝える史

料はみあたらない。前年に、管領細川高国と対立して出奔した将軍足利義稙に代えて、高国は、前将軍足利義澄の子、義晴を新将軍に擁立し、その政権を安定させた。大永二年に都周辺では政治・軍事的波乱はみられない。信貞の上洛は、軍事遠征に参加してのものではなかろう。また、単なる都見物ではないとすれば、信貞が、新将軍足利義晴と管領細川高国への祝賀のために、尾張守護・守護代から派遣された使者であった可能性も考えられる。

宗碩が、八月四日から七日まで伊勢山田で『伊勢千句』を吟じたのち、宗長と別れて桑名へ着き、尾張へ渡ろうとするところで、『佐野のわたり』の文章は終わる。織田信貞も大和・伊勢を経て、宗硯と同様の行程で尾張に帰ったと推測される。宗碩に同行した信貞は、各地を歴訪し、大和長谷寺へは多額の寄進をするなど、富裕な領主の気楽な旅であったかのような印象をうける。しかし、宗碩が伊勢から尾張へ渡海する旅に信貞を誘ったのは、尾張・伊勢方面での安全通行を保証できるだけの、信貞の影響力に期待してのものであったろう。

先に紹介した『張州雑志』の伝承によれば、大永年間に織田弾正忠家と津島が抗争し、大永四年に津島が服属したとされている。しかし、大永二年に、上洛した信貞が、伊勢・尾張を平穏に通行して帰国したとすれば、織田弾正忠家の津島進出は大永年間よりも早い時期に始まった可能性がある。少なくとも、『張州雑志』の伝える大永年間よりも早期に、織田弾正忠家の伊勢湾北岸への勢力拡大について検討してみる必要がでてきたといえよう。

織田宝岩祐居士と一休禅師

また、美術史家宮島新一氏は、平成八年（一九九六）に、酬温庵（しゅうおんあん）（京都府田辺町）所蔵の宝岩祐居士像を戦国時代の画像として紹介された。[註2] 同庵は、一休宗純（一三九四～一四八一）が創設し、のちにこの庵で死去している。連歌師宗長とゆかりの深い禅院でもある。同庵には、扇と数珠（じゅず）をもって掛絡（からす）をかけて畳に坐る、剃髪した武将の画像が伝わっている。上部に貼り継がれた一休の賛に、「織田宝岩祐居士肖像」とあり、一休が生前に依頼されて詠んだものと思われる。

さて、「宝岩」という法名に注目してみたい。織田弾正忠家は、良信が西（材）岩、その子信貞が月岩というように、その法名に「岩」＝「巌」を通字に用いるのが通例となっている（**系図**）。他方、尾張守護代を勤めた織田氏の嫡流系統（のちに、清須・岩倉両織田家）の法名は「常」を通字としている。

とすれば、一休宗純が画像賛を詠んだ、織田宝岩祐居士こそ、弾正忠家一族につながる人物である可能性が高い。織田氏の嫡流は、自身や父祖の画像賛を京都五山僧にしばしば依頼している。しかし、傍流とみられる弾正忠家が画像賛を一休宗純に依頼していたとすれば、同家には嫡流に匹敵しようとする志向や、それを可能にした経済力や、都の文化人との日ごろの交流があったとしなければならない。信秀以前の弾正忠家は、一休宗純が活動していた一五世紀代には、すでに尾張国内にとどまらない視野と、ひろく行動できるだけの経済力を持っていたと考えられるのである。

＊　＊　＊　＊　＊

蓬左文庫所蔵の『張州雑志』には、紹介した織田弾正忠家に関する史料のように、大変興味深く貴重な記事が数多く載せられている。しかし、その記事からのみ史実を判断するのでは、おのずと限界があることも明らかである。鶴崎・宮島両氏によって、従来見過ごされてきた史料について新たな事実が明らかになってきたように、さまざまな史料を検討することで、戦国期の尾張の様相がより豊かなものとなっていくのである。

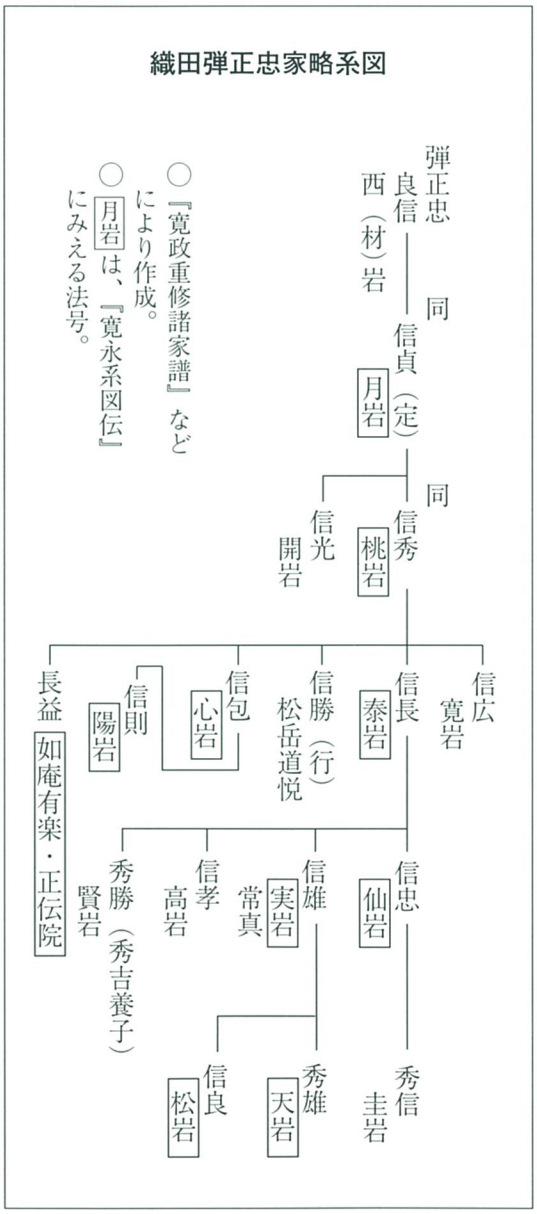
註

(1)『戦国を往く連歌師宗長』（二〇〇〇、角川書店）

(2)『肖像画の視線』（一九九六、吉川弘文館）

（下村信博）

織田弾正忠家略系図



○『寛政重修諸家譜』などにより作成。

○月岩は、『寛永系図伝』にみえる法号。

◆絵図のいろいろ（表紙口絵解説）

伝説的な禹（中国最古の夏王朝の創始者）から、清朝までの中国の歴史を地図入りで図解した中国歴史地図帖。

本地図帖は、木版多色刷で、黄色の表紙に、「唐土歴代州郡沿革図　全」と印刷された、青色の布題簽（だいせん）が貼ってある。折帖に仕立てられて、序文ののちに、見開きごとに、（一）大清国道程図、（二）禹貢九州図、（三）周職方氏図、（四）春秋列国図、（五）戦国七雄図、（六）秦三十六郡并越四郡、（七）西（前）漢州郡図、（八）東（後）漢郡国図、（九）三国鼎峙図、（一〇）両晋南北朝州郡図、（一一）唐十道図、（一二）大明一統二京十三省図、（一三）亜細亜小東洋図の順に、合計十三図が掲載されている。

江戸時代までは日本文化は中国の影響が強く、中国の歴史に関する書籍も数多く読まれていた。したがって、歴史書の理解を助けるために、早くから歴史地図が作られていた。当初は一枚物であったが、江戸時代後期には地図帖に仕立てたものが現れた。その代表作が、長久保赤水の『唐土歴代州郡沿革地図』（一七八九年刊）である。

長久保赤水（一七一七～一八〇一）は、名は守道、のちに玄珠（はるたか）、通称は源兵衛で、赤水（せきすい）は号である。常陸国の農民の子として生まれ、朱子学・地理学などを学んで水戸藩に仕え、『大日本史』地理志の編さんにも参加した。赤水は、『改正日本輿地（よち）路程図』（一七七九年刊）といった日本図、『改正万国輿地全図』（一七八五年ころ刊）といった世界図、『大清広輿図』といった中国図など多くの地図を出版して、後世の地図作成に大きな影響を与えた。

このように地理学の研鑽を積んだ長久保赤水は、中国歴史地図帖の編集者にふさわしい人物ということができよう。寛政元年（一七八九）に出版された『唐土歴代州郡沿革地図』は競って求められたようで、寛政元年から嘉永七年（一八五四）までの六六年間に六回以上も版を重ねている。

同書を二宮惶軒が補訂して出版したものが、『唐土歴代州郡沿革図』である。最初の版は安政二年（一八五五）に出版されたが、当文庫所蔵の本地図帖は第二版にあたる安政四年版である。奥書によれば、大坂の書店河内屋喜兵衛・伊丹屋善兵衛両人の版で、発売元としては江戸・京都の書店と並んで、名古屋の永楽屋東四郎が名をつらねており、本地図帖が東西で発売されたことがうかがえる。

唐土歴代州郡沿革図（図一〇四三）
安政四年（一八五七）刊　一帖
三六・一×二四・〇cm

名古屋市蓬左文庫
〒461-0023　名古屋市東区徳川町1001番地
TEL（052）935－2173
FAX（052）937－0350

◆交　通
名古屋駅、栄より
市バス（基幹バス２番）・名鉄バス（「本地ヶ原方面」行）
「新出来」下車、徒歩５分
大曽根より
ＪＲ中央線「大曽根」下車、南口より徒歩10分

開館時間　午前９時30分～午後５時
休館日　毎月曜日、第３金曜日
祝日（日曜、月曜のいずれかに重なる場合は、日曜開館、月、火休館）
年末・年始（12月28日～１月４日）
閲覧　館内のみ。館外貸し出しはいたしません。
閲覧時間　閉架図書　午前９時30分～12時
午後１時～５時
開架図書　午前９時30分～午後５時
複写サービス　保存上支障のないものについて、マイクロフィルム複写などの方法により行います。
電話・郵便による申込みも可。
取扱い時間　午前9時30分～12時　午後1時～5時
展示　所蔵資料のうち30件程度を随時展示。テーマ、期間、回数は、年度により異なります。

「蓬左」第64号　☆平成13年３月31日発行　☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫（名古屋市東区徳川町1001番地）
☆無料　☆不定期刊行　☆印刷：菱源印刷工業（株）　※この冊子は再生紙（古紙配合率100％，白色度80％）を使用しています。